



対馬が私の第二のふるさと

～自分を変えてくれた: 島っこ留学～

2015年度からスタートした「島っこ留学生」制度を利用し、対馬で暮らす留学生は現在9人。「自然の中で生活してみたい」「国境の島で歴史や文化に触れてみたい」そんな思いで毎年島外から子どもたちがやってきます。留学生の一人で、西部中学校に通う柴田龍成君は、中学入学と同時に留学をスタートさせました。親元を離れ対馬で2年を過ごした彼は、この島でしかできないたくさんの経験を通じて、たくましく成長しました。



これまでの生活を変えたかった

小学生の頃、あまり周囲になじめず、同級生との関係も、友だちの気持ちも理解せずに引っ張っていくというか…。まるでボタンを掛け違えたような感じでした。一緒に遊ぶ友達も少なく、一人で図書館に行ったり、家で過ごしたりという毎日。学校での態度もあまりよくなかったので、親が学校に呼ばれることもありました。

そんな生活を送る私の心の中には、常に違和感があって、何かを変えたいという気持ちがありました。母は、その気持ちを理解してか、私が小学校4年生の頃、他の地域で生活する留学生制度を勧めてくれました。当初は「知らないところで一人で暮らすなんて考えられない」と断っていたのですが、6年生になっても違和感は変わらず、対馬で行われた体験留学に思い切って参加することにしました。

夏に行われた体験留学では、そば打ちやシーカヤックなど、対馬でしかできない体験をたくさんしました。お世話になった人たちは、みんな優しく、楽しい思い出がたくさんできたことで、対馬だったら、今までとは違う生活が送れるんじゃないかと思いました。正直、これまでと変わらなかつたらどうしようかと悩んでいましたが、両親が「一人になってみて越えられるものもあるよ」と背中を押してくれたこともあり、対馬へ向かうことにしました。

中学生になり、親元を離れて、対馬で里親さんと生活する中で、実家での生活との違いに驚きや戸惑いがありました。一番の違いは、食事です。実家では両親の仕事の関係で、みんなで揃って食事をするのは休みの日くらいでした。それが、対馬の家では食事はみんな揃ってからなので、同じ家に住む留学生も含め大人数で毎日食事をしています。食事をしながら、その日学校であったことを話したり、時には相談にのってもらったりと、大人数での食事は、よりおいしく感じ、毎日の食事が楽しみとなりました。

対馬での生活は、これまでの生活とは大きく変わり、対馬で過ごした時間、経験のおかげで私は変わることができました。何事にも挑戦してみようという積極性を持つことができ、また、人に対する接し方や物事への捉え方が変わり、助け合い、協力することの楽しさや喜びを感じるようになりました。さらに、自分のことだけではなく、周りのことも考えるようになり、人とのつながりの中で挨拶や礼儀が大切であることを知ることができました。

環境を変えることは、不安で勇気のいることですが、自分が求め、決めたことであれば良い方向へ向かうと、この2年間の経験で感じています。



体験留学が対馬への留学を後押ししました



不安と期待を胸に迎えた入学式



対馬少年の主張大会では最優秀賞を受賞!!

島っこ留学生制度とは…

対馬独自の自然や歴史、国境の島としての交流などが体感できる対馬で学校生活を送りたい島外の小中学生を受け入れる制度で、これまでに18人が親元を離れ、対馬で学び、対馬でしかできない貴重な体験を行っています。現在、峰町と上県町の4つの小中学校で受け入れが行われています。





テストの答え合わせ！結果は…？



ソフトテニスにも熱中

勉強に！スポーツに！仲間と過ごす充実した日々

2月のある日、西部中学校にお邪魔すると、教室に柴田君の姿が。この日は、学年末テストの最終日で、午後からは答え合わせを兼ねた授業が行われていました。静かな教室の中、英語のリスニングや問題を英語で答えていく2年生…。いつもはもっと和気あいあいとした雰囲気ですが、取材ということで緊張していた様子。留学してきて、同級生とはすぐにうちとけることができたそうです。そんな仲間たちと一緒に過ごすことができる教室が、学校で一番好きな場所だと教えてくれました。

対馬に来て、スポーツにも熱中した柴田君。放課後はソフトテニス部で汗を流しています。テストも終わり、新人戦が近いこの日は凍える寒さの中、日が暮れるまで練習に励んでいました。

また、陸上の練習にも真剣に取り組み、昨年10月に行われた中学駅伝大会では、2年生唯一の選手として出場しました。前年度まで校区内が競技コースになっていたこともあり、駅伝に対する地域の期待も大きいこの大会に向けて、柴田君は、一生懸命練習に取り組みました。苦しい練習の中、里親のサポート、そして学校の仲間の存在がやり遂げる原動力となりました。



3位入賞に貢献

全校生徒の中から選ばれて襷を掛けるということでの重圧もあり、練習がきついと思う時もありました。そのたびに、みんなが応援してくれたり仲間の頑張る姿をみて自分を奮い立たせ、頑張ることができました。西部中で培った積極的になるということが、何事にもあきらめないという姿勢を生んでくれたのだと思います。



いつも明るい龍成

米田 健心君

もともと男子が2人だったので、龍成が西部中に来てくれたのは大きかったです。歓迎遠足の時に対馬のことを話して仲良くなったのを憶えています。行事の多い2年生の2学期には学級委員をしてくれて、クラス目標の「本気の一步」に向けて引っ張ってくれた頼もしい存在です。

この2年で大きく成長した息子

柴田 将秀さん（龍成君の父）

親元を離れて暮らすことに対し、不安がなかったわけではありませんが、この2年で大きく育ってくれました。駅伝大会を観戦したとき、身体も心も大きく成長していることにとっても驚きました。これから再び一緒に暮らすので、子どもの成長が間近で見られるのが楽しみです。対馬で自分の意見をしっかりと言えるようになっていたので、福岡に帰って来てからもその姿勢を大切にしてもらいたいです。



おかあと一緒に夕食の準備



みんな揃って「いただきます」

おとう、おかあ、ただいま!

部活を終え、里親である村瀬さんの家へ帰ると、入浴や食事の準備で慌ただしく過ごします。村瀬家には柴田君の他に、二人の男子中学生が留学していて、家の中はいつも賑やかです。実の息子のように接してくれる村瀬智哉さん・英子さんご夫妻のことを「おとう」「おかあ」と呼ぶ子どもたち。礼儀を大切に、留学生と真摯に向き合う村瀬さんとの会話は、実の親子のようでした。時には厳しいこともあります。それは子どもたちのことを第一に考えてくれているから。自分の子どものように育ててくれる「おとう」「おかあ」には本当に感謝していると柴田君は話します。

未来へ進むための決断

対馬で、仲間たちと一緒に卒業したいという思いもありましたが、将来の夢に向かい進むため、2年生の修了と共に福岡へ戻ることを自ら決断しました。

みんなの応援に支えてもらった対馬での2年間で、先生や里親、地域の人たち、そして仲間たちのおかげで、自分自身が変わることができたのだと思います。福岡に戻り、また元のような生活に戻ってしまうのではないかという不安はあります。しかし、自分の将来を考え、自分で進路を決めることができたのも対馬で変わったからです。くじけそうになったときは、第二のふるさとである対馬のことを思い出したら、乗り越えていけると思います。



掲げた「三刀流」の文字。福岡に戻っても気持ちは変わらない

地域と共に留学生の成長を見守る

里親 村瀬 智哉さん

地域を元気にするためには、子どもたちがたくさんいる学校が必要だと考えて、里親を引き受けました。

私のモットーは、礼儀を大切にすること。地域の人たちや学校でのあいさつをしっかりとすることについては厳しく言ってきました。子どもたちが地域の人たちに受け入れてもらうためには、あいさつなどの礼儀はとても大切だと思っています。子どもたちには、適宜目標を与えて、生活に張り合いが出るようにして、学校が楽しい場所になるようにアドバイスもしてきました。

しかし、かくいう私自身が、スポーツなどで子どもたちの頑張る姿を見せてもらうことができ、夢を見せてもらったと思っています。

